

大豆島小学校における防災管理意識の向上、
防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立大豆島小学校

1 はじめに

大豆島小学校は、開校から130年をこえる歴史ある学校である。児童数は662名、各学年3～4クラスずつの大規模である。長野駅周辺の中心地から比較的距離が近く住宅地が広がる一角に学校がある。学区には、エムウェーブや環境エネルギーセンターなどの施設があり、スケート教室やごみ収集に関わる社会見学では徒歩での移動が可能である。田んぼやリンゴ畑も広がり、夏には田んぼからたくさんのカエルの声が響き渡っている。

大豆島地区は、菊栽培が盛んで「巴の錦」の発祥地とされており、6年生は地域ボランティアの方々からご指導をいただき、毎年菊の栽培に取り組んでいる。地域には大豆島小学校を卒業した方々も多く、地域の方々から積極的に支援いただける環境にある。例年、地域の事業所に協力いただき、PTA主催で「夢ナビ」という職業体験学習を行っていた。

本校の学区は犀川と千曲川が合流する地点の北岸に位置し、多くの地域で市洪水ハザードマップの3mを超える浸水エリアとして想定されており、洪水に対する防災教育が喫緊の課題となっている。

2 大豆島小学校の防災体制について

(1) 概要

「校内生活並び校外生活において、児童が自分の生命を守るために適切な行動がとれるようにする」ことをねらいとして防災体制を整えている。地震や火災を想定した避難訓練を年3回実施し、年度初めに避難経路の確認、休み時間中の避難など計画的に行っている。

(2) 昨年度までの防災・防犯にかかわる主な計画

①避難訓練

- ・第1回避難訓練（4月）避難経路確認
- ・不審者対応訓練（6月）校内に不審者侵入時の避難等確認・警察官からの指導
- ・引き渡し訓練〔1学年〕（5月）保護者への引き渡し方法の確認
- ・第2回避難訓練（9月）防災の日に合わせた防災意識向上
- ・第3回避難訓練（11月）休み時間に起こる地震に備えた避難訓練

②安全点検

- ・月1回、管理責任者が管理場所の危険箇所や避難経路の状態を確認。

③危機管理マニュアルの見直し（修正）

- ・防災係が中心となり、マニュアルの内容について確認し、必要に応じて修正。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 避難訓練のあり方について

これまで前年度踏襲の形式的な避難訓練においては、避難経路を確認する、放送の指示に従って行動するという避難の基本的な行動様式を身につけるといった意味では一定の効果が見られている。しかしながら、避難訓練の実施内容が形骸化し、子どもたちからは当事者意識が薄れているように感じられ、東日本大震災のように想定外の災害に対応するための準備として不十分ではないかと意見する職員も出てきた。



子どもたちが当事者意識となって自分のこととして考え行動できるようになるための避難訓練のあり方についてアドバイザーからアドバイスいただくこととした。

(2) 洪水に対する防災教育について

本校学区は2つの大きな川が合流する箇所北岸に位置し、市洪水ハザードマップでは浸水被害について警告されている。大きな被害を被った3年前の台風19号の通過の際、大豆島地区も水害の危険にさらされていた。このような状況で、子どもたちが自らの命を守るための行動と家族や地域の人々の命を守るための新たな視点での防災教育についてアドバイスいただくこととした。



(3) 危機管理マニュアルの見直し

子どもたちの安全を確保するためには危機管理マニュアルを作成が必須であり、危機管理における各教職員の役割等を明確にするとともに子どもたちの安全を確保する体制を確立するために必要なことについて、全教職員が共通に理解することが求められる。危機管理マニュアルについては、例年防災を担当する職員を中心に見直し修正することとなっているが実際に災害を経験したことのある職員はほとんどなく、実質的な修正が加えられないことが実際であった。数多くの被災地の様子や被災現場を知る専門家に助言いただきながらマニュアルを見直すこととした。

4 今年度の取組

【学校防災アドバイザーによる職員へのアドバイス】

- (1) 講師 信州大学教育学部 教授 廣内 大助 学校防災アドバイザー
- (2) 実施日 令和4年10月5日（水）

(3) 内 容 ①避難訓練のあり方 ②洪水に対する防災教育 ③危機管理マニュアル

(4) 指 導

① 避難訓練のあり方について

実際の学校生活を基にした避難訓練の実施

- ・通常教室、休み時間の他に清掃中や特別教室への移動時など様々な場面を想定した避難訓練を行う。
- ・子どもたちに適切な退避行動を自分で考え、自分の身の安全を図るように促したい。
- ・退避避難方法の校内掲示が有効。
- ・いざというときどうするか、子どもたちの発達段階を考慮しながら、各自が考え意見を出し合い、それぞれ出された意見を踏まえて考えを深めていくよう支援していく。

② 洪水に対する防災教育について

- ・洪水の情報がある場合には、基本的に下校の措置をとる。
- ・引き渡し訓練等準備が必要。
- ・大豆島小学校は浸水警戒地域のため避難所としては不適切。突然の浸水等緊急の際は、大豆島小学校校舎を避難場所と考えることもあるかもしれないが、基本的に校舎の垂直避難という考え方ではなく、場所を移動し水平移動を考えるべき。水平移動を想定した避難について考えることも必要。



③ 危機管理マニュアルの見直し（修正）について

- ・豊田市の小学校で作成したマニュアルを参考に助言。
 - (a) 避難等の判断の基準となる気象・水象情報や河川事務所を決める。
 - (b) 判断の基準となる警報・注意報や水位を明確にする。
 - (c) a、bをもとにマニュアルを作成する。

5 事業の成果及び今後の課題

(1) 11月避難訓練（休み時間に実施）

休み時間に地震が起きた想定で避難訓練を実施。地震が起きた後、避難の指示を出す計画だったが、アドバイザーの意見を活かし地震の後火災が起きたことを想定に変更。

（子どもの感想）

- ・地震の音が終わって校庭に行こうと思ったら、ベルが鳴って驚いた。友だちと「どうしよう」ってなった。
- ・休み時間（の避難訓練）はどうしていいかわからない。友だちの後ろについていったけど、自分でも考えられるようにしたい。



(成果)

⇒子どもたちの多くは、想定していなかったことに対して戸惑いが見られた。
しかし、子どもたちなりにどうすべきかを考える姿が見られた。(=当事者意識をもって行動できた)

(課題)

→例年、休み時間の実施としている。避難訓練の実施時間について、アドバイスを活かし清掃時間など様々な場面で行えるよう計画したい。

→子どもたちは職員よりも早く集合場所に到着したため、校庭での集合(整列)に戸惑う姿が見られた。校内の退避避難の掲示の他に校庭など集合場所の周知も行いたい。

(2) 洪水に対する防災教育

(成果)

⇒廣内教授から話を聞き、洪水に備える準備ができた。防災係や教務主任などを中心として危機管理マニュアルの改訂を行いたい。

(3) その他

本事業の参加にあたり、本校の防災教育のあり方を丁寧に見直す機会となった。アドバイザーの廣内教授からは本校の今後の方向について明解に示唆いただいた。避難訓練、危機管理マニュアルの改訂などまだ課題があるが、アドバイスをいただきながら子どもたちの安全を確実に守れるよう努めていきたい。本校の防災教育の充実のためご指導いただいた学校防災アドバイザー、市教育委員会指導主事の皆様に感謝申し上げます。

(文責 教頭 伊藤幸信)

長沼小学校における防災・減災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立長沼小学校

1 はじめに

長沼小学校は、長野市の北東にあり千曲川沿いに位置する、全校児童 87 名の小規模校である。

2019 年（令和元年）の台風 19 号による千曲川の氾濫によって被災した。2020 年は、学校の立て直しと児童の心のケアに努めた 1 年間であったが、復旧がほぼ済んだ 2021 年（令和 3 年度）からは防災・減災学習を充実させていこうと考え、昨年度に引き続き今年度も本事業の活用を申請した。

2 長沼小学校の以前の防災体制について（概要）

もともと長沼地区は地震の災害や水害の歴史があったため、小学校での避難訓練の他に 4 年生以上が地域の防災訓練に参加していた。長沼体育館へ避難し、煙体験や放水訓練の見学、消火器・バケツリレー体験、非常食体験等を毎年行っていた。

長沼地区は昔から水害との闘いの歴史を繰り返していた。地域の学習で水害について調べたり、戊の満水の水位を表した標柱を見学したりしていた。また、堤防強化の目的で桜堤を造る事業があったため、平成 26 年度卒業の児童が桜堤という歌劇を作り発表した経過もある。劇中歌「桜づつみ」は、水害と闘ってきた歴史を知り、私たちのくらしを桜堤が守ってくれる希望の歌として平成 31 年（令和元年）まで歌い継いでいた。

このような歴史を学んできていたので、大災害に遭っても児童は全員無事であったが、学校の防災体制や今までの学習では不十分であることが明らかとなった。

令和 3 年度は、児童の心に配慮しながら防災・減災学習に取り掛かり始めた。手探りで学習や取組を始めたが、アドバイザー事業を活用しながら次のように進めてきた。

○1・2・3 年生は、日本赤十字社の防災・減災プログラムを受講し、「自然の中で起こりうる災害について」中でも「大地震の時の身の守り方」について必要な知識を学んだ。

○4・5・6 年生は、総合的学習の時間や社会科、理科に含まれる災害や自然災害にまつわる学習の発展として学習を進めてきた。信州大学の廣内教授と DoChubu の落合さんらが開発した“Field ON!”というソフトを使って地域の危険箇所を洗い出してまとめる学習や災害から人々を守る施設が地域にたくさんあることの学習をすることができた。

○高学年は、発展学習として自然災害の種類や、避難する時に気を



付けること、「自助・共助・公助」などの学習もした。

○10月13日の「長沼防災の日」には、地域の代表の方を招いて自分たちの学んだことを発表して全校の学びを共有した。

○その後、6年生はマイタイムラインを作る学習をした。また、SEEDS Asia という NPO のお誘いを受けて、日本各地やアジアの国の被災経験のある学校とオンラインでつながって情報交換等をした。



また、被災後、児童在校時に水害の危険がある時には、保護者への引き渡しと垂直避難をするマニュアルに作り直したが、専門機関より長沼小学校の場合これでは不十分であるとの指摘を受け、長沼小学校タイムラインの作成に着手した。防災アドバイザー事業を活用し、危機管理防災課の指導を受けながら、流域タイムラインや長沼地区のコミュニティタイムラインと連動した長沼小タイムラインを作成した。



3 学校防災アドバイザーの関わり

昨年度、信州大学の廣内教授に、長沼小学校に来校していただき、防災・減災学習の考え方を指導していただいたり、他校での実践例を教わったりした。考え方や取組のきっかけを教えていただいたので、あまり肩肘張らずに防災・減災教育に向かうことができた。

学んだポイントは、

- 防災・減災教育といっても大上段に構えるのではなく、取り組みやすいことから始めること。
- ベストでなくてベターでいいので、楽しく繰り返せることが大事。
- 防災学習には、正解がない。
- 「災害とは何か」から学習をスタートするものだが、「Field ON!」を使えば、自分たちの地域は何が危険なのか、どこが危ないのかを把握するところから始められる。危ない場所があるなら、逃げ道は？逃げ場所は？何のためにやる？→大切なものを守るため。そのための道筋を自分たちで考えていく。ディスカッションをすることがとても大事であること。

【日本赤十字社防災・減災プログラム】

1・2・3年生は、今年も日本赤十字社の防災・減災プログラムを受講した。1年生は、初めてなので、昨年と同じように、「自然の中で起こりうる災害について」と「大地震の時の身の守り方について」必要な知識を学んだ。2年生・3年生は具体的に災害に備えて避難するにはどうするかを学んだ。「持ち物は？」「いつ準備するか。」「身近にある災害」について学んだ。キットを使って、避難所に持っていく物について考えた。何がどうして必要か。何を大切に考えるか。実際の避難生活を知っているからこそ出てきた考えもあった。また、いざという時に持っていく物を考えたり、探したり、準備したりしている暇はないので、日頃から考えて用意しておくことが大切であることも学んだ。



【信州大学 廣内大助教授・内山琴絵特任助教】

10月13日の長沼防災の日に、昨年危機管理防災課の指導を受けながら作成した「長沼小学校タイムライン」に従って、市教委への連絡訓練、北部レクリエーションパークへの連絡訓練、保護者へのメール配信訓練、北部レクリエーションパークへの全校二次避難訓練、保護者への引き渡し訓練を行った。タイムラインに従うとすれば、全校避難ではなく、その前に保護者一次引き渡しがあるが、今年は初めてということもあり、全校で避難し、本来二次引き渡しを行うはずである北部レクリエーションパークで、全家庭の引き渡し訓練を行った。

実際に歩いてみると、距離が長いことや、車とのすれ違いで隊が止まってしまうこと、浅川を越える時の柵が1年生には安全性が低い事、実際の避難の時に雨風が強かったら・・・水かさが増して小さな水路が見えずに足をとられてしまったら・・・などたくさんの課題が見えた。反面、実際に歩くことで、避難する大変さがわかったり、避難の順路を考える学習になったり、6年生が1年生を助けながら歩くことで、共助の意識を持つことができたりしたことなど成果も多かった。

当日は、信州大学 廣内大助教授・内山琴絵特任助教の両先生、長野県教育委員会事務局保健厚生課の藤村ゆかり指導主事、長野市教育委員会事務局学校教育課の防災担当市川美紀子指導主事にも同行していただいた。

廣内先生からは、これだけ大規模な二次避難訓練をしている学校はほとんどないので、この経験をしたことは大変重要であること、6年生が1年生の面倒を見ながら避難していたが、不安を取り除くためにも話をするなど明るく非難するのも実は大事であること、どうしても人間は判断が鈍るので、避難開始になるきっかけ（トリガー）をもう少し明確に設定しておくことなど指導をいただいた。これからも継続してご指導をいただきたい。



【ドゥチュウブ 落合さん】

昨年、複数学年が「Field ON!」を使用すると、データが混ざってしまって使いにくかったため、正しく使えるためのマニュアルを再度作っていただいた。また、今年度フィールドオンを使って学習を試みようとする学年が5つあったので、マップIDを5セット作っていただいた。6年生は、前述の北部レクリエーションパークへの全校二次避難訓練で、実際の避難路が安全かそうでないかをフィールドオンを使って検証するのに役立てた。



また、4年生は地域を歩きながら、危険な場所を探す学習をした。今後1・2年生は学校内や学校近くで危ない場所を探す学習で利用する予定である。

4 その他 防災・減災学習に関する活動

○NPO「国境なき技師団」の仲立ちにより、早稲田大学防災教育支援会（WASEND）の学生さんとの交流が実現した。ワセンドさんからは、クイズを交えた防災・減災学習のプログラムを5・6年生に施していただき、台風19号災害の絵本を作りたいと考えているワセンドさんへは、5年生が当時の実体験を話したり質問に答えたりした。



○6年生は、総合的学習の時間を使って、長沼の防災減災を自分事として考える授業を行った。マイタイムラインを考える時間、水平避難を考える時間、防災ステーションについて考える時間、等自ら問いをもち皆で追究する授業を行った。

○6年生が昨年に引き続き、SEEDS Asia 主催のオンラインイベント「マイホームタウン（1月17日）」に参加する予定である。地域の紹介をしたり、自分たちの防災減災学習について情報を伝え合ったりする。



5 まとめ

19号災害で大変な経験をしたが、前に向かって歩み始めることができている。アドバイザー事業や外部の力を頼りにし、自分たちの地域や自分たちの安全を守る学習の基盤でき始めた。これから、チャレンジや経験を増やして、カリキュラムを皆で作っていききたい。そして、地域を理解し、いざというときに行動できる力をつけていきたい。また、今後地域と共にこの学習や取組を進めていきたい。

（文責 教頭 丑澤 智成）

学校安全総合支援事業の取組について

—学校防災アドバイザーによる、避難見直し—

長野市立松ヶ丘小学校

1 はじめに

本校は長野市安茂里地区の西側で、すぐ裏に富士ノ塔山がそびえ、眼下に犀川を見渡す小高い丘の上に立っている。東西に沢が走っており、かつて鉄砲水が体育館に流れ込んで被害を受けたこともある。長野市ハザードマップでは、洪水の指定緊急避難場所に指定されているが、土砂災害の指定緊急避難場所には指定されていない。このような状況であるので、洪水、土砂災害などの危険が迫った時にどう判断したらよいか、より綿密な事前準備が必要とされる。

2 松ヶ丘小学校の防災計画

学校防災計画を作成し、その計画に沿って訓練を行っている。

(1) 指導の方針

- ① 自ら考え判断し、安全に行動できる子どもの育成。
- ② 自分の命を自分で守ることができる子どもの育成。

(2) 指導の重点

★地震及び火災時に安全に避難ができるように避難訓練や緊急時引き取り訓練を通して、安全な避難方法を身につける。

- ① 非常ベルが鳴ったら黙ってその場に座り、その後の緊急放送に耳を傾ける。
- ② 緊急放送を黙って正しく聞き取る。
- ③ ファンヒーターなど火の元の消火をする。
- ④ 指示に従い、口をハンカチなどで覆い黙って速やかに校庭に避難する。
- ⑤ 荷物を持たずに歩いて安全に避難する。
- ⑥ 休み時間では必要に応じて高学年児童は、低学年児童といっしょに避難する。
- ⑦ 引き取りに来たお家の方を確認し、安全に下校する。

★地震発生時に自分の命を守る方法ができるように避難訓練を通して、適切な護身方法を身につける。

- ① 窓や入り口の戸を開ける。
- ② 教室では机の下にもぐる。
- ③ 頭を帽子や座布団などで覆う。

- ④ ファンヒーターなど火の元の消火をする。
- ⑤ 屋外では屋根の下、建物、石垣やブロック塀のそばを離れる。
- ⑥ 荷物を持たずに歩いて安全に避難する。
- ⑦ 休み時間では必要に応じて高学年児童は、低学年児童といっしょに避難する。

(3) 管 理

活動内容と計画

- ① 緊急時引き渡し訓練【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、保護者 140 人】
期日 6 月 15 日（水）
- ② 避難訓練の実施（地震及び火災時の避難訓練を 3 回実施）
 - 第 1 回 5 月 10 日（火）※火災想定：基本的な避難経路の確認
【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、消防署より 3 人】
 - 第 2 回 9 月 1 日（木）※地震想定：防火扉体験、消火訓練
【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、消防署より 3 人】
 - 第 3 回 11 月 1 日（火）※火災想定：休み時間の避難方法確認
(告知)

(4) 非常持ち出し物品の点検・購入

(5) 安全点検の実施（年間計画に位置づけ）

- ① 点検期日 毎月 1 日
- ② 管理組織表に基づき安全点検を実施。
- ③ 安全点検表を後日配布。

(6) 防護組織の編成

(7) 土砂災害に対する避難のための情報収集

関係機関（県・市など）と連携して避難のための情報を収集していく。



3 防災アドバイザーと共に考えたこと

上記の防災計画を元に訓練を例年通り訓練を行ってきっていたが、防災アドバイザーの先生から「この学校で1番災害を考えなくてはいけないのは、土砂災害ではないか」というご指摘をいただいた。そこで校舎や裏山の地形を一緒に見て回っていただき、以下のようなアドバイスをいただいた。



- 山の斜面は、分厚いコンクリートで固められているが、パイプから水が出ていないと、水をため込んで崩れてしまうので、注意して見る必要がある。
- 山側には旧校舎が建っており、それがいざという時には土砂を食い止める働きにもなる。
- これだけの斜面に建っているので、大雨の時には沢から水が溢れて危険である。東日本大震災の時に家庭に帰ってしまったせいで命を落とし、今だ裁判が続いているような問題もあるので、場合によっては下校させず待機させたほうが良いケースもある。
- 保護者が車で迎えに来た場合、かえって災害に巻き込まれて危ないということも考えられる。
- 土砂災害が発生した時は、下の安茂里体育館が避難場所になっているが、そこまであるいていけるのか。いざという時には、校舎の垂直避難を考えておいたほうが良い。

- もし、垂直避難を考えた場合、救援が来るまで何日かたえなければいけない状況もある。その場合の防寒や食料が十分蓄えられているか。いないとしたら、市をお願いしていく必要がある。
- 団地に住んでいる子は、洪水の被害も考えられるので、難しい地域ではある。

4 事業の成果及び今後の課題

避難訓練や引き渡し訓練は例年通り行うことができ、災害や地震の訓練はしっかりできるようになっている。しかし、土砂災害を想定した訓練は正直できていない。おそらく、保護者も、地域の方も、その意識は薄いのではないか。今回そういった方面からアドバイスをいただいたので、今後学校だけでなく保護者や地域の方を巻き込んで、土砂災害が起こった時にどう対処していくか考える機会をとっていきたい。児童も、自分の住んでいる地域や学校周辺はどんな地形の特徴があり、どんな危険が潜んでいるか、学習していく必要がある。

(文責 教頭 堀田 茂樹)

防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

— 地域と共に総合防災訓練 —

長野市立信里小学校

1 はじめに

信里小学校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹に位置し、児童数 33 名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる自然豊かな環境にある。農業が盛んで、りんごや野菜の栽培の他に、400 を超える溜池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことで知られ、現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜池も潜在的な危険がある。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なかったり、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

2 防災教育の取組

本校は、本支援事業の指定を受け 9 年目となる。学校防災アドバイザーの先生方にご指導をいただき、「自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した防災活動」をめざして、信里地域委員会（住民自治協組織）と連携し、「信里地区総合防災教室」を実践してきた。そして、今年度は下記のような実践を行った。

3 信里地区総合防災教室の実践

(1) 活動の流れ

◆信里地区総合防災教室 9月10日（土）授業参観日として開催

- 1 校時 防災アドバイザーから地震について学ぶ(校長室から各教室へ Zoom 配信)
- 2 校時 避難訓練・消火訓練
- 3 校時 全校で防災学習「防災マップ作りに向けて～地域の危険箇所・安全施設～」
- 下校時 引き渡し訓練

【参加者 全校児童 33 名、保護者 16 名、地区役員 17 名（各地区長、地域委員会事務局）学校評議員 4 名 計 70 名】



(2) 防災教室の様子

① 地震の歴史と地震への備えについて（講演）

【支援者 廣内大助 学校防災アドバイザー（信州大学）
本間喜子 学校防災アドバイザー（信州大学）】

戊の満水、善光寺地震の様子、犀川をせき止めた岩倉山の崩壊など過去の被害を絵図や写真と共に講演を聞いて学習した。また長野市に地震が起きたときの被害想定にふれ、その被害の大きさに驚く姿があった。そういった地震に備えて、自分の命は自分で守ること、自分で考え行動できることが大切であると学んだ。地震の際は、「机の下に隠れる」「頭を守る」「机の脚を持つ」行動で身を守ることを確認し、この後の避難訓練に生かすことができた。

<児童の感想>

- ◆むかしじしんがおきたことをしらなくて、すごくこわいなおもいました。(1年)
- ◆危険なところや、どこに逃げるか、どこにひなんするかを教えてもらってよかった。
家に帰ってから、おばあちゃんちの部屋の落ちてきそうな物を片づけました。(2年)
- ◆地震で、たなとか古い神社がたおれるんだということを知りました。(3年)
- ◆地震はいつ起きてもおかしくないということがよくわかりました。(3年)
- ◆地震のお話を聞いて、家族と地震や洪水とかのために、考えることにした。(4年)
- ◆いつ地震が来てもいいように備えておこうと思った。地震が来ても焦らないで避難したい。(4年)
- ◆長野県はあまり地震がないと思っていたら、昔にも大きな地震が起きていたので、しっかり準備しておきたいです。(5年)
- ◆地震は身近にあって、6弱という地震も30年後に起こるかもしれないので、真剣に取り組まなくてはいけないと思った。常にどうすればいいかを考えて行動しなきゃいけないなと思った。(6年)

② 避難訓練・消火訓練

【参加者：児童30人、教職員13人、保護者22人、地域住民5人】

【支援者：篠ノ井消防署5人 篠ノ井第五分団8人】

参観日に教室に集まった保護者や地域住民 約40名が、児童と共に緊急地震速報受信システムの音声を聞き、安全な避難訓練を体験した。前日の雨により、避難場所を校庭から体育館に変更し、校内を通過して避難した。消火器による消火訓練はできなかったが、消防士から消火器の説明を聞き、実際に消火器を持つ体験をした。また地域の消防団による放水訓練を見学した。



<子どもの感想>

- ◆しょうぼうしさんがいろんなことをいっぱい教えてくれてうれしかったです。(1年)
- ◆かじがあったら、あんぜんなところをみつけてにげたいです。(1年)
- ◆机の下にかくれるときに、机の脚を押さえているといいんだなと思いました。(2年)
- ◆消火訓練では準備も速くてすごかった。(3年)
- ◆消防団の人が大変にならないように、火事をなくしたいと思う。(4年)
- ◆もし階段にいるときに地震が起きたらどうすればいいのか気になった。(6年)

③ 地域学習「防災マップづくりに向けて～地域の危険箇所と安全施設を知る～」

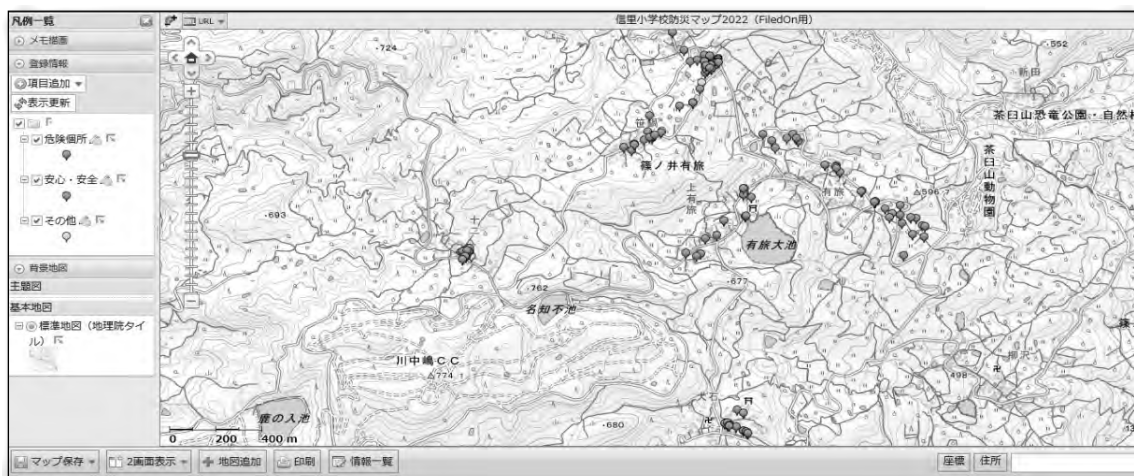
【参加者：児童30人、教職員13人】【支援者：各地区の区長15名、保護者16名】

地区児童会ごと4つの教室に分かれ、児童が個々に家の周りですべてきた危険箇所等の写真を見せながら、その場所やあぶない理由などを発表する。その発表を聞いて、気づいたことや聞きたいことなどを出し合う。区長や保護者も話し合いに参加し、昔の被害等知っていることを話していただいた。まとめでは、各教室をZoomでつなぎ、学習して分かったことや感想などを発表し、お互いに共有した後、防災アドバイザーの先生のお話を聞いた。



＜児童の感想＞

- ◆自分の知らない場所を知ったので、今度一度見て回りたい。(2年)
- ◆安全な場所は撮ってなかったけど、避難場所は学校なので、どうやって行くのかというも家族で話したいです。(2年)
- ◆ふだんからあぶない場所を気にしていなかったなので、防災マップをやってよかったです。(2年)
- ◆Aさんの写真で、石のへいが地震の時にくずれたらあぶないなと思いました。(2年)
- ◆ささなべ、十二、青池には、灯籠や池がとても多いし、たおれやすい石や古い木がたくさんあったので気をつけたいです。(3年)
- ◆また危険な場所や安全な場所を探したい。見つけたら、地域の人にも伝えたい。地域にはお年寄りが多いので、気をつけてほしいと思った。(4年)
- ◆ふだん遊んでいる場所やいつも歩いているところも危険な物とかがあった。(4年)
- ◆わたしの地区は山の木がいっぱいあるから、地震が起きたら、木が倒れて道路の方に行っちゃうからあぶないと思った。(4年)
- ◆みんなの発表を聞いて、自分があんまり気づかなかったところもみんなのおかげで知ることができた。(5年)
- ◆わたしが知らないあぶない場所を知れた。また、どうして、いつ危険なのかも分かった。もしそういう場面になったら、その場所は避けて避難したい。(5年)
- ◆自分たちが住む区でそれぞれ話し合っ、これからどのようなことに気をつけるか確認できてよかった。これからどこが危険になるのかも話し合っていきたい。(6年)
- ◆地域のことをさらに知ることができたからよかった。(6年)



④ 防災アドバイザー 廣内先生本間先生の指導より

- ・いろいろな場所が出てきたが、いつもの場所も何があぶないか？という見方が変わった。
- ・時々、「あぶない」という視点で見るとよい。
- ・「こんなときどうする？」と、いろいろなパターンで考えてみるとよい。
- ・子どもはいい視点で危険な場所を見ていた。保護者、地域の方と一体となる機会をもつことができた。今後地域の危険を見直すなど様々な活動につながっていくのではないか。
- ・みんなが撮ってきた危ない場所の情報を共有したことで、近くに行かない等行動に結びつけていたのがよかった。
- ・地域の皆さんの昔あったこと等が参考になった。安全なうちに写真を撮っておくといい。
- ・自分の命は自分で守ろうという意識が高まり、全校で安全の勉強ができた。

4 防災アドバイザーとの関わり

(1) 7月19日(火) 15:00~17:00 信州大学教育学部 廣内大助先生 本間喜子先生

地域と共催の総合防災訓練の事前打ち合わせを区長会長1名、消防団員1名、学校2名 計6名(アドバイザー含)とともに行う。



(2) 8月24日(水)
9:30~11:40 低学年と高学年に分けてご指導
信州大学教育学部
本間喜子先生
特定非営利活動法人
ドゥチュウブ 落合鋭充氏

- ・Field ON! (撮影した写真を地図に反映するためのアプリ) の使い方の説明と練習。
- ・防災マップ作りに向け、児童が家の近くの危険箇所等を撮影する際に、どんなものを見て撮ってくるか(何が危険か、どこが安全か)の説明。

5 まとめ

(1) 地域との共催で防災意識を高める

防災マップ作りに向けて、子どもたちは保護者とともに家の近くの危険箇所や安全な場所をタブレットで撮影してきた。いつもは何気なく通っている場所が、危険があるかもしれない、という視点に立って見ることができた。またその写真を発表し合ったことで、地域をより知ることにつながり、防災に対する意識が高まった。区長や保護者も参加し、助言や質問をするなど共に学び合う機会となった。区長からもこの取り組みを地域の安全につなげていきたいという要望が出されたことから、信里の防災マップとして整え、地域や家庭に発信していきたいと考えている。

(2) 災害に備える

自分の身を守るためにはどうすればよいか、防災アドバイザーの先生のお話から、もしもの時にとるべき行動を親子で確認することができた。その後の緊急地震速報装置を使った避難訓練では、その内容を生かし、真剣に訓練に臨む児童の姿が見られた。さらに災害の起こる場所や時間帯等によって行動のしかたも変わることから、様々なパターンを想定した訓練をしたり共通理解を図ったりしていく必要がある。

(文責 教頭 鷹野絵理)

清野小学校における、学校安全総合支援事業の取組について
 親子防災教室：「非常時に持ち出すものを確認しよう」
 5年生：「避難時の支援行動について」

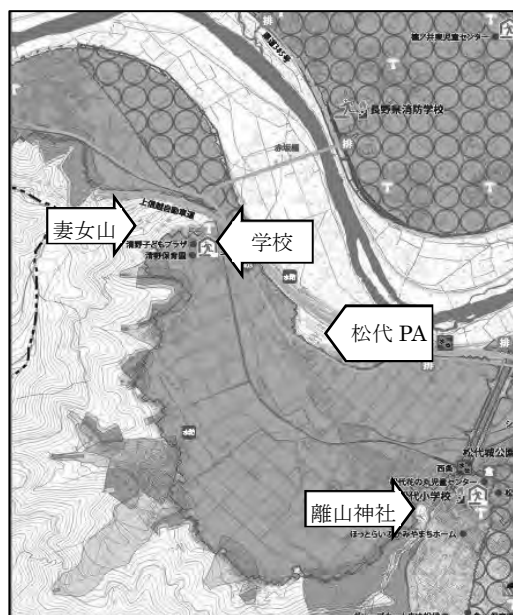
長野市立清野小学校

1 はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。校庭の東側には清野保育園があり、合同で避難訓練を行っている。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する1区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる2区、学校東側で大部分は平地部の3区（ともに松代町清野地区）の3地区に分かれている。児童数は31名で、徒歩で集団登下校をしている（下校については、子どもプラザ利用の児童を除く）。

学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで5～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。この地域は水害常襲地域でもあり、過去には江戸時代の『戊の満水』（1742年）や昭和57年の台風18号災害で浸水被害を受けている。なお、戊の満水の際には、学区東端のやや小高くなった部分の上にある離山神社の境内に多くの人が避難したとの記録がある。

令和元年の台風19号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難する等、有事の際には身の安全について考えなければならない地域である。



2 本校の防災学習

令和元年度、4年生が総合的な学習の時間を利用して、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。この学習は、自分たちの住む地域がハザードマップで赤く塗られ、浸水想定区域となっていることを知った子どもたちが、周囲よりも高く安全な場所はどこなのか考えるところから始まった。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用し、危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。これ以後、本校では実践的な防災学習を行ってきた。

	全校親子防災教室	3年生	5年生
令和2年度	「親子で通学路の危険個所点検をしよう」	「洪水が起きたときの行動を考えよう」	「防災マップ作り」

令和 3年度	「我が家のタイムラインを作成しよう」	「清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ」	「清野の土砂災害について調べよう」
令和 4年度	「非常時に持ち出すものを確認しよう」	「地域の防災設備について」	「避難時の支援行動について」

3 本年度の取組について

(1) 親子防災教室 「非常時に持ち出すものを確認しよう」 9月13日（火）

①ねらい

いつ起こるかわからない自然災害の怖さを知り、非常時に持ち出すものは何ほどのくらい必要かを考え、万が一の場合にはどのような行動をとればいいのかを知ることができる。

②参加者

全校児童 31 名、保護者 28 名、学校職員 9 名、学校評議員 1 名、市教委 2 名、信州大学教育学部特任助教授 内山琴絵先生

③活動の概要

- ・ 参観日に設定し、親子で共に考えることができるように登校班ごとに集まった。
- ・ 学習の前半では、各家庭で持ち寄った非常持ち出し袋の中身を確認しながら、実際の避難時に必要なものを話し合った。
- ・ 避難場所で使える道具の紹介として「新聞紙スリッパ」「カップ」「コップ」などの作り方を5年生から説明し、参加者全員で作成した。
- ・ 避難所グッズの体験コーナーを設営し「簡易トイレ」「段ボールベッド」「間仕切り」などの使用感を体験してもらった。
- ・ 防災教室終了後の週末を利用して各家庭で防災について話し合ってもらい、感想等を含め後日ワークシートを提出していただいた。



④活動後の声

- ・ 電池が入っていなかったり、切れていたり、消費期限が過ぎていたり、年に1回は見直さなければならないことや、他家族の準備している品が確認できて参考になった。緊急で使用する物品を、いかに快適に使用するには何が必要なのかも考えさせられた時間だった。避難所で生活するとなると、プライバシーを守る物がないので、テントみたいなものもあれば便利だと思った。（保護者）
- ・ 非常持ち出し袋の確認をして、すぐに持ち出せるように、飲み物や食べ物、救急セットなど生活に必要なものだけでなく、ホイッスルなど自分の居場所や危険を知らせる道具を入れておくとよいと思った。家族で避難することも考えて必要なものは複数準備することも大切だと思った。（児童）

⑤講評

- ・ 令和元年台風19号の水害の経験をもとに防災グッズをそろえた家庭がいて、「養生テープが使える」など、実際に活用した情報を共有していたことがよかった。「知っている」と「経験している」ことは違う。段ボールベッドに寝てみたり、簡易

トイレに入ってみたりしたことは重要である。(信州大学教育学部特任助教授 内山琴絵先生)

(2) 避難時の支援行動について

「水害発生時に地域の方々のために状況に合わせて、自分たちはどんな行動ができるかを考えよう」

11月30日(火)・12月1日(水)・
12月6日(火)



①ねらい

水害発生時、高齢者や体が不自由な方のためにどんな支援ができるのか、実際に高齢者の方と一緒に地区を歩く(フィールドワーク)中で支援の有効性や課題を発見する。

②参加者

5年児童8名、民生児童委員3名、信州大学学生2名

③活動の概要

- ・廣内先生(信州大学教育学部教授)の研究室の協力により、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用する。
- ・各地区の民生児童委員さんから2019年「台風19号災害」での地域の避難行動や現在の地域の様子を聞き、清野地区の防災課題を考える。
- ・長野市防災ハザードマップをもとに清野地区の一時避難場所を想定、高齢者とともに避難する中で、考えられる支援行動を実際に行い、有効性や課題を考える。
- ・支援行動の様子をタブレットで撮影し、フィールドオン上のマップに必要な支援についてコメントと共にのせる。

④児童の様子

- ・実際に地域の方から話を聞くことにより、災害について詳しく知ることができ、自分たちが経験していないことを知る大切さを感じていた。
- ・コロナ禍により地域全体の結びつきが希薄になる中で、児童自身も自分の家の周りの方について知らないことがある。地域の様子を知ることが地域全体の防災につながることに気づいていた。
- ・地域の方と一緒に避難場所まで歩くことは、自分たちでは気づかなかったことや、必要な支援を考えることにつながっていた。

【児童の感想より】

- ・台風19号災害時の避難状況や現在の地域の様子を聞くことで、実際に避難するときに、どんな行動をとればいいのか、どんな支援が必要なのかを考えることができてよかったです。災害が起きたときのために、普段から避難方法や避難ルートなど訓練しておくことが必要だと思いました。
- ・フィールドワークで気付いたことがたくさんありました。例えば多くの避難場所とされる所には、たくさん階段がありました。高齢の方や障害を持っている方は、階段では登れないと思います。私たちができ



ることは、「坂がきつい場合には後ろから押してあげる。」「後ろで倒れてきてもいいように支える」「グレーチングのある場所を避ける。」ということがありました。

- 1区の妻女山は、避難するには、地区からの距離がとても遠いです。高齢者や車椅子の方などは簡単には行きません。でも、他の地区の様に階段ではなく、なだらかな道なので後ろから支える支援をすれば高い所にある避難場所まで行くことができます。
- 2区の林正寺は、行くまでの道がとても急です。両側に用水路もあり、行くまでの道がとても危険でした。高齢者の方とフィールドワークをすることで、自分たちの視点では、普段気づかないことがわかってよかったです。
- 3区の離山神社をはじめ、避難できる所には急な階段がたくさんあります。足が不自由な方や車椅子の方などは、登れないことがわかりました。私たちは、普通に登れるけれど登ることが困難な方がいることを知りました。

【児童のまとめより】

- 災害時には、今の状況を正確に判断するために、テレビやラジオ、防災無線などで、避難が必要なかを判断し、すぐに行動することが大切です。災害が起きた時には、避難が困難な方がいます。その人が何を求めているのかを考え、その人に合った支援をしていくこと1人ではなく地域全体で命を守っていくことが大切だと考えます。
- 災害が起きた時に1番大切なのは、自分の命を最優先することです。そのうえで、自分たちが考えた支援をすることで、自分の近所に住んでいる人の命を、地域全体の人の命を救えるように行動をしていくことが必要だと思いました。

4 終わりに

令和元年度から始まっている本校のフィールドワークを中心とした防災学習は、これまでに「地区の危険個所」「水害について」「土砂災害について」と地区が抱えている課題について学習を積み重ねてきた。このことにより、清野小学校の子どもたちの防災に対する意識は高くなってきている。さらに、本年度の取組によって、子どもたちの意識を広げることができたと感じている。今後の取組としては、「避難する人の立場」や「安全性を高めるための避難場所設置」等について、児童の意識を大切に活動していきたい。

(文責 防災・安全教育担当 長浦宏樹)

学校防災アドバイザー活用事業による防災教育の改善

— 「わが家の防災タイムライン」作成と3校合同引き渡し訓練 —

長野市立豊野東小学校

1 はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童139名の小規模校である。近隣には千曲川、鳥居川、浅川が流れており、令和元年10月の台風19号による千曲川の氾濫の際は、学区内で床上・床下浸水の被害を受けた家庭があった。本校体育館は避難所となり、多くの被災者が2ヶ月ほど避難生活を送ることになった。

このような本校の立地からも防災教育の充実が必須であると考え、「学校防災アドバイザー活用事業」を中核とした教育課程の改善を図っている。今年度は地区住民自治協議会との連携を継続するとともに、豊野地区3校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）の連携も重視して防災教育に取り組んできた。

2 昨年度までの取組概要

学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）のご指導を受け、子どもたちや職員の方の防災の知識・理解・技能の向上を図ってきた。具体的には職員研修の実施と、高学年児童一人ひとりの防災タイムライン作成に取り組んだ。また、豊野地区3校や地域との連携についても、学校防災アドバイザーの助言のもとに地区住民自治協議会を交えて検討し、共通教材の活用や教務主任会で引き渡し訓練の立案を担当することが決められた。

3 今年度の防災教育推進

防災・減災の意識を高め、必要な対応、行動を理解することをねらって防災教育を推進した。具体的には以下の3点について、学校防災アドバイザーの支援を得ながら進めた。

- ・ハザードマップを見て児童が自宅周辺の実情を知る
- ・災害時の行動指針について学び、災害に備える意識と具体的な方法を理解する。
（タイムラインや具体的な対策の見直し、更新）
- ・豊野地区3校の合同引き渡し訓練を計画、実施する。

取組内容

(1) 1学期 地区との取組【参加人数：教職員6人、児童139人、地区より4人】

① 地区のハザードマップを使った学習

7月5日～7月14日の期間に、全学年が生活科、総合的な学習の時間において防災教育の授業を行った。豊野地区の地区住民自治協議会から講師をお迎えし、ハザード

マップで豊野地区全体と自宅周辺の様子を確認し、もしもの時に備える意識を高めた。

② 防災倉庫の見学

5年生は、区長会の皆さんと共に、学校敷地内に設置された防災倉庫に収納されているものを見学した。非常食や発電機、浄水器などを確認し、避難所での生活を具体的にイメージすることができた。



1年生教室にて

(2) 2学期の取組

① 3校合同引き渡し訓練

【参加人数：教職員 18 人、児童 139 人、保護者 99 人（本校のみ）】

9月2日、豊野3校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）合同で引き渡し訓練を実施した。児童を保護者に引き渡すまでの安全確保と指導を確認するため、登校した状態から保護者に引き渡すまで、兄弟関係で複数校へ迎えに行く場合を含めた一連の動きを検証した。

事前に保護者へメール配信にて引き渡し時刻を周知し、14:20に訓練を開始。16:02に全家庭への引き渡しが終了した。



教室にて引き渡し

② 防災タイムラインの作成・更新

【参加人数：教職員 3 人、児童 72 人】

10月13日、11月9日に学校防災アドバイザーによる高学年への授業を実施。4年生は自分の防災タイムラインを新規作成し、5、6年生は昨年度作成したタイムラインを更新した。



タイムラインを考える

③ 職員研修 【参加人数：教職員 17 人】

11月9日、本校職員を対象に学校防災アドバイザーによる講演をいただいた。過去の災害の様子や安全対策、避難行動、タイムラインの必要性や情報収集の方法などについて資料をもとにお話いただいた。

4 学校防災アドバイザーの関わり

8月25日、学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生にご来校いただき、防災教育の推進について打ち合わせを行い、以下の3点を依頼した。

- ・ 3校合同引き渡し訓練への参加と事後指導
- ・ 児童のタイムライン作成に関わって、作成での留意点や更新時のポイントの指導
- ・ 職員研修の講師依頼

9月2日には、3校合同引き渡し訓練に合わせて来校いただき、訓練開始前から終了後まで参観いただいた後、以下のような事後指導をいただいた。

- ・全体としてはスムーズに引き渡しできていた。
- ・校舎内も迷うことなく教室で引き渡しできていた。緊急時に引き渡しカードに記載のない人が来た場合、教室配置がわからない場合もあるので、昇降口の消毒のあたりにマップを置いておく、案内の先生を配置しておくもよい。
- ・引き渡しが長時間になると子どもが落ち着かなくなるが、教室内にいることが大事。
- ・5、6年生の受付に手続きの仕方が書いてあり、これはわかりやすいので続けたい。
- ・大倉チェーン脱着場も混乱なくスムーズに駐車できていたが国道を信号機のないところで横断する家庭があり、災害時には見通しも悪くなるので危険。
- ・要配慮家庭には事前に一番近い駐車スペースに停めるよう伝えてもよい。
- ・人数が少なくなってきたら、不安になるので図書館に集めて安心させるのもよい。
- ・災害時の引き渡しメールの配信は早すぎることはなく、決まり次第、配信して知らせる。

10月13日には4、5年生の、11月9日には6年生の教室にて授業に参加いただき、災害時の行動やタイムライン作成のポイントについてお話いただいた。また、11月9日には職員研修の講師としてもご指導いただき、職員の防災意識向上につながった。

5 事業の成果および今後の課題

(1) 成果

学校防災アドバイザー本間喜子先生のご指導を受けながら、子どもたちおよび職員に防災についての知識・理解を深めることができた。子どもたちが自分で防災タイムラインを作成することは、実践力の育成につながっていくと考える。

豊野地区3校間や地域との連携について、各校学校防災アドバイザーのご指導のもとに合同で訓練が実施できたのは大きな成果である。

(2) 課題

豊野3校における共通カリキュラム(小学校～中学校9年間の計画)の作成を視野に入れ、引き続き学校防災アドバイザーにご指導をいただきたい。

6 まとめ

令和元年の台風19号による災害を教訓とし、自校の防災体制や教育内容を再構築しようとして、本支援事業で信州大学の本間喜子先生からご指導をいただいていた。今年度は本事業によるご指導を中核にして、豊野地区3校による合同訓練の実施ができたことは大きな一歩であった。児童の命や生活を守るという最も大切な点について、専門家のご指導や地域との連携の必要性を強く感じる。本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

(文責 教頭 徳武 哲)